矢作川方式の成り立ち

矢作川の環境を守る住民活動の歴史は古く、明治時代にさかのぼります。当時、過度の伐採で山林が荒廃し、洪水や濁水、土砂崩れなどが流域で多発しました。このため農業用水団体が、上流部の水源林の造成を実施。農業の団体が水源林をつくるという、珍しい環境保全活動でした。

非常に多くの運動が展開され始めたのが1960年代。高度成長期、矢作川はとても汚れてしまいました。流域の山砂利の採取、源流部の宅地・ゴルフ場の開発が無法的にされたのが原因です。当時の川を知る人は「川の水がみそ汁のようだった」と話しています。水田は不栄養化。河口域では、ノリやアサリの養殖が大打撃を受けました。このため1966年、農業・漁業関係の団体、自治体など18団体が矢作川沿岸水質保全対策協議会（以下矢水協）を設立。

1970年代に入り、水質汚濁防止法が制定されたことを受け、矢水協が全国第1号となる告発をしました。また「自分たちで水を守ろう」という意識が芽生え、流域のパトロールを開始しました。違法に排水を流している工場の監視や、抗議活動を地道に続けていきました。

やがて、この流域で一定以上の開発行為をするときは、必ず矢水協と協議するという仕組みが定着しました。これは紳士協定ですが、環境被害を及ぼすような開発を起こさずに済むため、現在も守られています。さらに矢水協では、流域全体の連携を積極的に進めました。上流の子どもたちを潮干狩りに招待する、三河湾で捕れたイワシを上流域の山村の朝市で売る、といった流域内の交流活動を盛んに実施しました。こうした一連の活動は「矢作川方式」と呼ばれ、全国に知られるようになりました。住民主体の河川環境保全のモデルケースとなっています。

この矢水協が残した言葉「流域はひとつ、運命共同体」は、矢作川を象徴する一つのスローガンになっています。

矢作川流域概要

矢作川は長野県下伊那郡大川入山、愛知県茶臼山を源とし豊田市、岡崎市、安城市、西尾市、碧南市などを経て三河湾に注ぐ一級河川
幹線流路延長117㎞
流域面積1830㎢
流域人口112万人
河口から34～80㎞の範囲に農業、工業、上水道、発電用のダム７基が設置されている　平均水利用率40.8%（1977～1995平均）

川の保全は官民一体で

●西広瀬小学校の活動

豊田市立西広瀬小学校では、1976年から矢作川の水質調査を始めました。この取り組みは、やがて保護者を巻き込んで大きな活動へと発展。2003年には連続調査日数10000日という偉業を達成しました。矢作川の小さな見張り番として、27年4カ月にわたり川を見守る活動は、今日も続けられています。

●筏下りに多数の参加者

1987年に始まった筏下り大会は、毎年5月第2土曜日に開催されます。かつての筏流し（川を使って木材を運ぶ流通方法）の歴史を振り返ると共に、地域の人が川と親しむイベントとして定着しています。

●近自然型工法で整備

全国に先駆けて、近自然型工法による護岸工事を施工した古鼠水辺公園。護岸をコンクリートで固めてしまうのではなく、水衝部に巨石を用いた水制工を施したり、玉石を使った散策路を整備するなど、地域に親しまれる矢作川を目指しました。施工後、地元住民が周辺の竹林を伐採。現在では、広葉樹が広がる憩いの場になっています。

❶矢作川「川会議」には諸団体の代表者が参加し今後の「川づくり」を話し合う
❷近自然工法を採用し、地域の憩いの場となった古鼠水辺公園
❸矢作川水系森林ボランティア協議会と地域の森林研究者による市民参加型森林調査
❹水辺愛護会は現在13団体が市に認定されており、河川の維持管理活動を実施中
❺西広瀬小は1976年から毎日、矢作川の水質調査を実施。小さな見張り番として活躍

●維持管理を市が支援

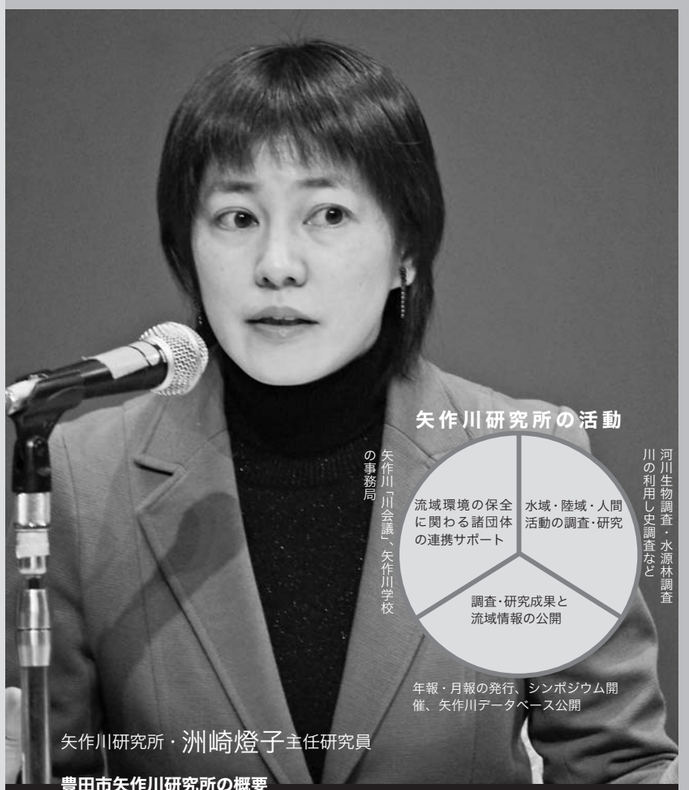
地元住民主導で立ち上がった環境美化団体「水辺愛護会」は、現在13団体が市に認定され、市からの支援を受けて活動しています。また愛護会同士で連携して連絡会を設立。定期的に勉強会や視察会を実施し、より良い水辺環境について話し合っています。

●水道料から森林基金

豊田市の水道使用量1㎥あたり1円を徴収し、矢作川上流の森林の間伐費用などのために積み立てています。放置され、水源涵養の機能が低下した森林を再生させるのに役立っています。

矢作川研究所が仲立ち

矢作川研究所が設立された1994年当時、矢作川はダムの影響により極端に水が少ない川になっていました。愛護団体による個々の活動はなされていましたが、川辺には竹林が目立ち、上流域の森林は荒廃、生態系にも影響が出始めていました。一般の人たちにとって、川は身近な存在ではなくなっていたのです。そんな状況を打破しようと、豊田市、矢作川漁業協同組合、枝下用水土地改良区が合同出資して矢作川研究所を設立。1998年には、常勤研究員を置いた市営の研究所となりました。矢作川の環境保全を目的として、天然アユなど水生生物の調査、上流域の森林調査、河川愛護団体の活動サポートなどを実施しています。また毎年5月第2土曜日を「矢作川の日」と制定。関係団体を集めて川会議を開き、情報交換や川を守る意識の共有を図っています。



矢作川研究所・洲崎燈子主任研究員

豊田市矢作川研究所の概要
豊田市矢作川環境整備計画検討委員会（1990～1993）の提言を受け、1994年、豊田市・矢作川漁業組合・枝下用水土地改良区の合同出資により第３セクター方式で設立。1998年より常勤研究員を配置して市営の研究所となる。矢作川が抱える諸問題の解決のため、多角的な調査研究を実施。また川や里山の自然・文化を守り受け継ぐ次世代の育成にも力を入れている。個々の活動団体をサポートし、流域全体の連携強化に取り組む。

自ら行動を起こす姿勢

矢作川環境改善の道のりは決して平坦なものではありませんでした。しかし、まずは自分ができることを考え実践してみる。そういった流域の人々の前向きな姿勢が、矢作川を守ってきたのではないかと思います。

矢作川流域では、子どもから大人まで、楽しんで活動に取り組んでいます。楽しんでいるからこそ、続いているんです。大井川流域でも、これらの事例が参考となり、住民主導の環境保全が進めば素晴らしいことです。

矢作川研究所洲崎燈子主任研究員が語る「矢作川再生」への道のり

住民主体の矢作川環境保全

愛知県の矢作川流域では、住民が主体となって取り組む環境保全活動が盛んだ。流域全体が一つとなり、都市住民をも巻き込んだこの活動は、現在も広がり続ける。豊田市矢作川研究所洲崎燈子主任研究員が語る矢作川再生への道のり。大井川流域環境保全のヒントとなるか。